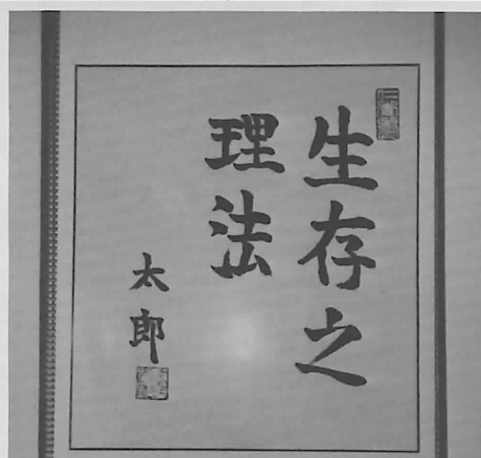


# 生存科学研究所

## ニュース

Vol.2. No.4.

1987.7.10発行



### 目次

- |                         |   |                                |    |
|-------------------------|---|--------------------------------|----|
| ● 遺伝子と人間 山村雄一 .....     | 1 | ● 昭和62年度第1回・第2回理事会 .....       | 5  |
| ● 科学技術立国における教育の問題 ..... | 2 | ● ヘルス・サイエンスとヘルス・サイエンティスト ..... | 7  |
| 一第9回『科学と人間』の会議          |   | ● エッセイズ・キュート .....             | 7  |
| ● 国際競争と生存科学 .....       | 3 | ● 維持会員だより .....                | 8  |
| 一第33回生存科学研究会            |   | ● 生存科学研究所主催岡山講演会               |    |
| ● 現代経済学と経済政策の国際化 .....  | 4 | 一「高齢化社会の地域医療」のご案内 .....        | 9  |
| 一第5回メティコ・エコノミックス研究委員会   |   | ● ニュース・オブ・ニュース .....           | 10 |
| ● 厚生行政における意志決定過程 .....  | 4 | ● 公益信託武見記念生存科学研究基金ニュース .....   | 11 |
| 一第13回地域医療のあり方研究分科会      |   | ● 国際シンポジウム・ワークショップ             |    |
| ● 包括医療における医薬品の役割 .....  | 5 | 一「医薬品の開発と行政および倫理」のご案内 .....    | 12 |
| 一第4回医薬品産業の長期展望に関する研究分科会 |   | ● 編集後記 .....                   | 12 |

発行：財団法人 生存科学研究所

〒104 東京都中央区銀座4-5-1

聖書館ビル303

電話 03-563-3518

## 遺伝子と人間

大阪大学名誉教授・生存科学研究所顧問 山村雄一

世界的に最も広く読まれている『Cell』や『Nature』を開いてみると、「ああこんなすばらしいことがわかったのか」という記事が毎号のように載っている。医学や生物学関係の記事に限っていうと、その多くは遺伝子DNAのクローニングによる構造の決定と、生理作用に関する論文である。

特定の生理活性をマーカーとして、その活性蛋白を単離し、そのアミノ酸配列を基に蛋白をコードするDNAの全構造を定めるといふ方法論のめざましい進歩は、遺伝子サイエンスと呼んでよいようなブームを引きおこしている。免疫活性物質として注目されたインターフェロン $\alpha$ 、 $\beta$ 、 $\gamma$ はもとより、インターロイキンの1から5にいたるまで、すべて遺伝子のクローニングが行われ、アミノ酸構成と配列も決定され、工業生産が行なわれ、あるいは行なわれようとしている。

長い間その存在が予想されていた、人間のがん遺伝子のいくつかの構造が明らかにされ、ウイルスによる発がんも、化学物質による発がんも、その機構は、がん遺伝子を中心として共通の場で論じられるようになった。さらにがん遺伝子のなかには、正常な細胞の増殖因子に由来すると思われる構造をもつものが見つかっている。生存に必要な不可欠の遺伝子が、死に導く遺伝子と表裏一体となっているのである。

組みかえ遺伝子法にはじまる遺伝子をめぐるテクノロジーの画期的進歩は、人間の持つすべての遺伝子を今世紀中に決定してしまう

という勢いである。すでにアメリカとヨーロッパでは協同研究の話合いが進んでいるし、日本にも参加の要請が来ている。

現在のところ、医学や生物学の研究にたずさわる多くの人達が、それぞれ興味をもつ遺伝子の構造と機能の研究に集中しており、なかでも種々さまざまな生理活性や免疫活性物質をコードする遺伝子については、すぎまじいまでの先陣争いが夜を日に継いで行われている。

その結果、これまで稀に出現する疾患としてとり扱われてきた遺伝病が、ありきたりな疾病と遺伝子レベルの異常として、共通のメカニズムを持つものがあることがわかってきた。高尿酸血症を伴う脳性小児麻痺様症候を示すLesch-Nyhan病と、痛風との関係がその例である。今や遺伝病は遺伝子DNA病となり、DNA分子の構造異常として、明快にとらえられるようになってきたのである。遺伝病は遺伝子病と呼んでよい時代になった。

やがて老化の機序や、人間の寿命を規定する遺伝子にまで及ぶことであろう。だが、出生直後に余りに多くの一生のできごとを個人が予知するようになることは、果して人間に本当の幸福をもたらすことであろうか。そのときの人間生存の価値観はどのようなものになるだろうか。

樹は伸びても天までとはどかない  
ようにできている

ゲーテ「わが生涯より」

## 第9回「科学と人間」の会議—科学技術立国における教育問題—

本会議の座長を務められている岡本道雄委員は、臨時教育審議会（臨教審）の会長を務めており、これまで日本の教育に関する審議を過去2年半かけて行ってきた体験を踏まえて、私見として科学技術と人間の問題を提起するための話題を提供した。今回の会議は、座長の話題提供を中心として、これまでの本会議で行ってきた課題とあわせて、自由討議を行うことを目的としたものである。このようなことで、岡本座長の話題は、本会議の総括にもあたるような問題を、日本の学校教育（幼稚園から大学まで）における教育の根本的問題とあわせて提起したものであった。

日本の科学技術行政の柱は、3本の柱からなっている。1. 基礎科学の振興、2. 人間社会との調和を図りながらの科学技術の推進、3. 国際性を重視した方向の科学技術の推進という柱である。これら柱の中でも科学技術会議の11号答申の中心になったのは、科学技術を推進していくためには人間社会との調和を考えねばならないという点であり、それは第2の柱にあたるものであった。この柱は、日本の教育の問題とも重なるもので、今日の社会の時世の中で、科学技術政策の基本と人間社会との調和をどのように考えていくかということを描している。

岡本委員からは、一応これまでの臨教審の第1次答申から第3次答申に至るまでの経過の概略が説明された。例えば、教育の自由化、科学技術文明、教育の国際化、教育制度、個性重視の原則、教育改革の人間化、生涯学習

体系の意向、情報化、9月入学……である。これら臨教審の答申の位置づけをどこに置くかであるが、第1の教育改革が明治、第2が第2次大戦終了時、第3が昭和46年の中教審、とみることができることから、この第3の教育改革の延長にあるという見方ができるということである。以上が臨教審を中心とした話題ではあるが、この問題の背景にある日本の科学技術立国を目指して進められてきた日本の社会の現状が大きく関わっていることを指摘した。

このようなことが、岡本委員の話題の中心であったが、その結びとして岡本委員は、教育問題とはいえ、その歴史は明治以来の日本が科学技術立国としての発展を目指してきたという連続した政策に起因していると考えているし、また日本が世界の中で、先進諸国の一員として存在していこうとするなら科学技術の道は今後とも推進していかなばならないものであると述べた。

岡本委員の講演後、本会議出席者の委員による自由討議が行われた。その討論は日本が科学技術立国とはいうが、本当に科学が育ちまた存在し得たであろうかということと、教育が科学技術立国にふさわしい創造性ある人材の育成に役立ったのであるかどうかということ、また国際化というが、教育や科学技術によって何が国際化になるかというようなことであった。本会議としては、このような多岐に渡る問題を次回には整理をしながら討議していくことになった。

## 国際競争と生存科学—第33回 生存科学研究会—

5月23日(土)午後2時から、経団連会館において、第33回生存科学研究会が開催された。62年度のテーマは、前年度の「ハイテクノロジー社会と生存科学」を引き継ぎながら、さらに一步踏み込んで「国際競争と生存科学」と決定されている。今回はその第一回として、大江精三会員から、この主題に関連して話題提供という形で話があり、引きつづき参加会員との質疑応答が行なわれた。

会議の始めに、前回から会員になっている館山の梅園会員、新たに会員になった八戸の中里会員、ゲストの東工大情報工学研究施設小門宏教授、早大人間科学部木村利人教授が紹介された。

\* \* \* \*

大江会員は、まず「生存科学」について、ライフサイエンスといわれるそれぞれの学問は、厳密な科学的方法論を持っており、知的強制力を持つが、それらをひとまとめにして考えられるライフサイエンスと同様、生存科学はそういう意味での厳密な科学とはまだ言えないかもしれない。しかし、ライフサイエンスの進歩に基盤を置いて人間の問題を掘り下げようとするもので、むしろフィロソフィーであり、科学としての知的強制力はなくても、哲学としての説得力は持つものでありたい、といわれた。

次いで高齢化社会における子供の教育問題について述べ、良い子供を育てる条件としての家庭の重要性を論じられた。さらに、エスキモ一人に育てられた日本人の赤子と、日本

人に育てられたエスキモ一人の赤子という一つの想像実験を例に取り、国民性を自然的要素と文化的要素に分析され、その分析による認識に基づいて、日米、東西の国際競争について、具体的な事例を紹介しながら考察を加えた。

さらに、人間の、生物の進化の結果としての自由とそれに基づく創造性を競争力として理解し、尊徳翁の「天理に従って種を撒き、天理に背いて草を刈り、欲にしたがって家業に励み、欲を制して義務を思うべし」という言葉を引用しながら、生きようという人間の動物としての健康な欲望を、コンペティションという形で残す必要を説かれた。

\* \* \* \*

討議では、ゲストの木村教授から、国民性に根ざした日本人の価値観と、国際世界の価値観とに共通性があるかとの質問や、日本が国際的に孤立するのではないかと危惧されるといふ土屋会員の発言があり、板垣会員から、「科学と哲学の間に生存科学の問題があり、精神世界の科学的探究であると考え。人間存在は環境のなかにあり、国民的環境と国際的環境とのなかにある。よりよき家庭が生存の基本である、と大江会員は言われた。個別の価値観と普遍的価値観があり、普遍的価値のトランスミッションに伴なうレセプションのプロセスでのレスポンスが国民性で異なる。日本人の価値観は中間原理(相対的普遍)で支えられているのではないか。」というコメントがなされた。

## 現代経済学と経済政策の国際化 —第5回メディコ・エコノミックス研究委員会—

5月9日午後2時より研究所会議室で開催された第5回研究委員会における報告者は、早稲田大学教授の田村貞雄委員で、日本経済政策学会第44回全国大会共通論題「経済発展のダイナミズムと福祉基準」にメディコ・エコノミックスの視点より参加するための論文を話題として話された。

\* \* \* \*

結論を先取りして言えば、経済発展のダイナミズムにより、環境と人間行動が変わり、福祉基準も変わってくる。すなわち非経済的福祉要素の評価やグローバルな福祉観の確立が重要になってくる。このような福祉観に相応しいのが、Human Survival Orderに基づく健康福祉観であるというのが報告者が学会に報告する基本的視点である。この場合、数多くの経済理論及び経済政策論研究者に一挙に新しいモデルを提示するのでは余りにも唐突であるので、現代経済学の理論と政策の発展過程との関連において、新しいモデルを示すという方法を取った。

そこでまず、現代経済学における重要理論である「新古典派総合」の理論と政策と「反

ケインズ革命」の理論と政策の特長と問題点について検討した。それによると前者は国民国家の経済理論と政策の特長をもち、経済政策の国際化に難点を持っていること、そして後者は自由経済論の国際的展開により理論的には首尾一貫性はあるが、「市場の失敗」の国内版を克服したものではないので、実際の視点からは問題が多いことを指摘した。そのあとで、マクロ経済を世界経済と定義し直すべきであるという、P・ドラッカーの「新しい経済学を求めて」を紹介することにより、地球社会の経済政策の必要性の主張の足場とした。

そして最後に健康福祉開発の実践的観察を参考にして、自由経済システムと計画的調整システムの統合のためのモデルづくりの展望を行なった。そしてこれを基盤として、地球社会の経済政策のシステム化をおこなう必要があることを主張した。

\* \* \* \*

以上の報告の後、全員での討議で、経済政策の国際化の困難性が議論され、理念を高く掲げることの重要性と、具体的政策提言の必要性が合意された。

## 厚生行政における意志決定過程 —第13回地域医療のあり方研究分科会—

4月16日午後5時より、第13回委員会が開催された。今回は、東海大学経済学部助教授武見敬三委員が、厚生省における政策の意志決定過程を検討。老人保健法改正、中でも中

間施設に焦点を当て、色々な資料やヒヤリングの結果の検討から、法案作成段階における現在の厚生省内での政策決定過程に、民主主義社会における行政のありかたとしては問題



があるということを具体的に指摘した。

このことを、厚生省が、老人保健審議会や中間施設に関する懇談会等を通じて医療関係者の意見を尊重したような形を取りながら、老人保健施設の管理責任者を医師でなくてもよいとしようとしたり、拠出金の配分だけを審議する筈の老人保健審議会が老人保健施設

での医療の費用を決めようとしたり、更にそこで定額制医療費を導入しようとしたことを、法案の省内での立案過程から国会審議まで資料に基づき、分析して証明した。

国会審議にもとづく、今後の修正の成り行きが注目されるが、それでもこれからの医療の動向が懸念されることが議論された。

## 包括医療における医薬品の役割

### —第4回医薬品産業の長期展望に関する研究分科会—

5月30日午後2時より、研究所会議室において第4回医薬品産業の長期展望に関する研究分科会が開催され、藤野志朗委員長（中央大学経済学部教授）自ら表記の題で、豊富な統計資料、推計値を示しながら、以下のように報告された。

\* \* \* \*

我が国は21世紀には高度な高齢化社会を迎える。国民の有病率は14才未満と65才以上の人口比率に相関する。入院受療率も予想以上にこの比率に相関する。従って紀元2000年

には、我が国の有病率は極めて高くなり、入院受療率も同様に高くなると予測される。

このように将来の医療需要の急増が予測されるが、それは必ずしも受療、入院という形ばかりであるとは限らない。疾病構造の変化も考えなければならないが、セルフケアやセルフメディケーション等の分野の開発が、プライマリ・ケアの中で考えられる必要があり、その需要に答える医薬品の開発も考慮されなければならない。

## 昭和62年度第1回・第2回理事会

5月28日(木)午後2時から、銀座日産ギャラリー会議室において財団法人生存科学研究所昭和62年度第1回理事会・第2回理事会が開催された。

\* \* \* \*

第1回理事会の第1議題は、昭和61年度事業報告並びに収支決算承認の件で、その内容は前日の27日に行なわれた評議員会において説明され、評議されたものであり、理事会において全員異議なく承認された。

事業報告では、財団が設立されて3年目、基礎仕上げの年として、基本研究の確立及び拡充と、それに必要な基本財産を確保すべく全力を傾注したが、国際的な大変動の影響から、資金の入手見通しは1年遅れ、やっと年度末に予定を大幅に縮小してではあるが、その予約を得ることができた。この間、収入と支出のずれから事業の展開は、誠に厳しい状況になったこと、このため、特別研究、自主研究、受託研究ともそれぞれ貴重な展開と深

化が行なわれ、ハーバード大学との提携事業もボストンでの国際会議への参加、支援、協議等は充分に行なわれたが、基本研究の一部は第4/4半期に準備委員会の発足をするのが精一杯となり、正式な展開を次年度へ繰り越すこととなったことが説明された。

決算では、収入の部で、基本財産収入1億2千8百8拾万円余、寄付金収入は、継続寄付1千1百2拾万円余、一般寄付8拾5万円、特別寄付1千万円であり、支出の部では、管理費3千5百9拾万円余、一般事業費7百3拾万円余、特別事業費3千7百3拾万円余、受託事業費1千6百1拾万円余、基本財産繰り入れ有価証券支出1億8千6百万円であり、財団の資産合計は、基本金6億5千1百3拾万円を含め7億7千5百5拾万円余である。

議題2は、新役員選任の件で、さる3月28日に行なわれた昭和61年度第2回理事会での「任期満了に伴う新役員の人選を理事長に一任する件」で承認された議題に基づくものである。理事長により推薦された下記の新役員候補者が全員一致で承認された。

#### 新役員

##### 理事

青木 清	飯島 敏夫
大谷 藤郎	開原 成允 (新任)
亀井康一郎	茅 誠司
熊谷 洋	小泉 明
小平 敦	高木 文雄
武見 敬三	田村 貞雄
筑井 甚吉	土屋健三郎
津村 昭 (新任)	永瀬 正己 (新任)
中野 徹雄 (新任)	中山 昌作
藤井 隆	古澤 健彦
不破敬一郎	松前 達郎 (新任)

宮島 龍興

安川 正彬

監事

鈴木 雪夫

三藤 邦彦

\* \* \* \*

引き続いて行なわれた第2回理事会においては、下記のように、理事長、副理事長及び専務理事が互選により決定され(従前と同じ)、また顧問、技術顧問、及び評議員が推薦された。

続いて評議員会招集者を理事長とする件、専務理事補佐制度の取り止めの件が協議され承認された。これらは、研究所の基礎が確立されてきたため、それまでの困難な時期に柔軟に対処するための仕組みから平常の形に替えるためのものである。

最後に寄付行為第35条、細則の件が協議され、研究組織に関する規則、(研究委員会及び研究員制度)、維持会員制度規則、生存科学研究会規則が承認された。研究組織に関する規則により、研究活動の運営がより向上すると期待される。維持会員制度、生存科学研究会等は既存のものであるが、規則により位置付けを明確にするものである。

##### 理事長、副理事長、専務理事

理事長	茅 誠司
副理事長	熊谷 洋 藤井 隆
専務理事	小平 敦

##### 顧問、技術顧問

顧問	板垣 與一(新任)	井深 大
	大江 精三	H.H.ハイアット
	松前 重義	山村 雄一
技術顧問	近藤 次郎	

##### 評議員

上野 公夫	梅田 幸雄 (新任)
遠藤 勲	大内 幸夫

大久保修吉	気賀真一郎	内藤 祐次	中神倭文夫 (新任)
吉川 暉	国井長次郎	馬場 甫	藤川 正信
慶松 駿輔	小西新兵衛	藤沢 正輝	J.マシア
佐藤 安武	澤 啓祥	松本 洋	持田 英 (新任)
高桑 栄松	高田 勲	山口 正民	
武田 裕 (新任)	田島 達郎		

## ヘルス・サイエンスとヘルス・サイエンティスト

昭和44年のことであるが、武見先生は通産大臣大平正芳、厚生大臣斉藤昇、労働大臣原健三郎、通産政務次官藤原正行の各氏と「働く人の健康を守る座談会」(東京タイムズ主催)をもち、産業医学を基盤にした科学的労働行政への転換を提言されるとともに、health science時代の到来を予言し、health scienceを人間の生存にとって、なくてはならない学問であり、Industrial HealthとがCommunity Healthに関し、病気の治療の立場でなく、健康時の健康擁護、健康増進という体制を産業の中で考えていくhealth scientistが必要である点を指摘された。各大臣とも賛同と協力の約束をするとともに、大平通産大臣は産業政策に必要な「人間にまとめ上げる新しい科学」と認識し、health scientistには経営コンサルタントといった意味の素養を持ったヘルス・コンサルタントの必要性について言及している。さらに武見先生は、労働科学局、労働衛生局とhealth scientistも入れた総

合的な産業医学研究所の設立を提案された。その後昭和51年に、労働省の産業医学総合研究所として発足し、武見先生はその開所式に出席されたのである。この座談会のなかで、health scienceの学問は東大と北里大にだけあってと言及された。当時筆者は北里大学衛生学部産業衛生学科衛生管理学教室を主宰していたが、本学科の学問的基盤は、まさにhealth scienceであり、この卒業生をhealth scientistとして養成しなければならないと決意したものである。その後、10年余を経て昭和60年に日本健康科学学会が発足している。

かえりみると、武見先生と大平、斉藤両大臣は御他界になったが、health scienceの提言とその確立は、高齢社会と産業社会の転換の中にあって現在着実に結実しつつある。(注 本座談会の全文は、「現代の産業病」中央労働災害防止協会発行 昭和45年、に掲載されている。)

(高田 勲)

## エッセイズ・キュート

最近、三年ぶりで、NTT厚木電気通信研究所を訪れた。今年はじめ、世界で始めて16メガビットのメモリLSIの試作に成功し世界

的に名をあげたところだ。

三年前には、やはり世界で始めて1メガビットのメモリの開発に成功していた。この時、



つぎは4メガの開発ときいていたが、これを飛び越えていきなり、16メガだからおそれいった。

前回の訪問で、最も印象的だったのは、研究者の年齢の若いことであった。当時案内してくれた主任研究員が「私は40才だから、もうついていけません」といっていた。

ところが、今回開発の責任者となった研究員の年齢は40才である。また、その4人の部下のなかには、41才の人もいるという。つい質問がでてしまった。

「失礼ですが、あなたも40才では、次の世代のLSIの開発は無理ということですか」

「40才になったら駄目というのは、本人には分からないのです。周りの人の判断することです。私自身は、まだまだと思っています」

本当に失礼なことを聞いてしまった——と

恐縮したが、同時に内心は嬉しく思った。かねてから——反論出来るほどの知識があるわけではないが——40才限界説には、納得いかぬものがあったからだ。

「若ければ出来るとか、知識があるから出来るとかいう問題ではないのです。やる気があるかどうかの問題です。大学を出て、ここに入ってくる人に、一番問いたいのは、そこです」

勿論、ここに集まって来る若き研究者は、日本のなかでも優れた人という前提での話であろうが、それでも「やる気」が最大の問題というには驚いた。

「あと3年たったら、また来なければなりませんね」帰り途、同行したA君がいった。

(〇)

## 維持会員だより

故武見太郎先生には、生前特別の御交誼を受ける機会もありませんでしたが、約1年前より生存科学研究会に出席させて頂き、その度毎に先生の理念の偉大さを感じております。生存科学の内容については、依然として理解の及ぶところではありませんが、医療を考えるためには、医学的な知識だけでは不十分であり、哲学・経済学・社会学・歴史学・理工学その他学問の集積を得ねば不可能であることは、一公衆衛生学徒として、常に感じているところです。その意味で、本研究会は、各界の権威が出席され、そこでの講演やディスカッションは、小生にとり、血となり肉となる栄養素になっており、大変感謝しております。

今回、編集委員の皆様より、本欄に何か書

くようにのお誘いがあり、大変光栄ですが諸先輩の御批判に耐えられる文を書けるか危惧しております。

小生は歴史小説が好きで司馬遼太郎や子母沢寛などに私淑しています。また考現学的な面では、上智大学の渡部昇一教授に啓発されています。歴史小説が何故面白いかと問われれば、主人公の結末が分かっている、歴史上の人物の善悪や、その人生の歴史的意義を小説家が脚色できる点にあると思います。今NHKの大河ドラマで独眼竜伊達政宗を放映していますが、政宗が弟の小次郎を殺す場面で側で見ていた小学校6年生の長女が、「結局、お東の方（最上御前）の兄が悪いのね」というコメントを發しました。たしかに攻撃

的な政宗を毒殺して弟の小次郎を擁立しようとする動きの背後には最上の叔父がいる可能性があり、政宗が主役であるドラマでは、悪役です。しかし戦国時代は、食うか食われるかの時代で、最上の叔父は、兵士の戦死を防ぐために平和的に、奥州の治安を確立したかった人格者であったかもしれません。奥州の覇者伊達政宗からみれば、その力をそねむ悪者と割り切ってレッテルを貼ることになります。その割り切りと歴史的人物観というのでしょうか、それが歴史小説の面白さのエキスポだと思います。

今、政界では、田中派からの総裁候補選挙にからんで、20億円/パーティを開いて資金を集めたとか、そこに出席した議員は何の何某だとか連日報道されています。このような現象の三二版は、日常でもみられることですし、その金の行方などを考えると決して楽しい思いはしません。しかし、今の政界の動きも「小説吉田学校」のような歴史的浄化と歴史的人物観をもって生まれ変わると興味深いものになる可能性はあります。

医学の歴史は、他の歴史に比べると一般に

無味乾燥です。発見と業績の羅列であり、どろどろとした人間味がないのが普通です。医学史に残る業績も、医学者の功名心と競争心により生まれたに相違ないのですが、インスリンの発見にまつわる話などの他、あまり取り上げられないことがないようです。ただ渡辺淳一の「遠き落日」は人間野口英世の人生をまさに外科医のメスで切開し描いている点印象的です。

とりとめのない文になりましたが、故慶大客員教授山口与市先生の「医の本領はいずれにしても、まず人間の理解である」という言葉を拝借し、雑文の結びとさせて頂きたいと存じます。（会員・北里大学 相澤好治）

#### 新規維持会員・寄付者の紹介

（昭和62年4月1日～昭和62年5月31日）

#### 個人会員

ト部文磨 前兵庫県医師会理事

大関 堯 青森県医師会理事

小林 登 国立小児病院院長

土谷 忠 下都賀郡市医師会病院勤務

土井三乙 八戸市医師会副会長

### 生存科学研究所講演会のご案内

#### 第2回 岡山講演会「高齢化社会の地域医療」

日時 62年7月11日(土) 午後2時～5時

場所 岡山衛生会館 中ホール

開会の辞 永瀬正己 岡山県医師会長

挨拶 熊谷 洋 生存研副理事長

講演1 「高齢化社会における地域医療計画」

演者 倉田正一 慶応大学名誉教授

コメンテーター 山口正民 元大阪府医師会長

主催 生存科学研究所

後援 岡山県医師会

講演2 「高齢化社会における医療経済」

演者 筑井甚吉 大阪大学社会経済研究所教授

コメンテーター 梅園忠安 房医師会専務理事

特別発言 亀山一郎 岡山県医師会理事

閉会の辞 小平 敦 生存研専務理事

参加ご希望の方は(財)生存科学研究所まで (☎03-563-5195)

長畑正道	筑波大学心身障害学系教授	株第一勧業銀行	1,305,000円
原 晋二	原産婦人科医院院長	株大和銀行	690,000円
原田隆宜	青森県医師会副会長	中部電力株	5,000,000円
松田孝治	松田クリニック院長	株東京銀行	975,000円
師岡孝次	東海大学工学部教授	株東芝	6,350,000円
<b>法人会員</b>		日本コンデンサ工業株	60,000円
株講談社		株日本債券信用銀行	450,000円
<b>寄附</b>		株日本長期信用銀行	795,000円
九州電力株	3,300,000円	株富士銀行	1,305,000円
株協和銀行	975,000円	北海道電力株	1,900,000円
株埼玉銀行	450,000円	北陸電力株	1,800,000円
株住友銀行	1,200,000円	株三井銀行	1,305,000円
立石電機株	210,000円		

## ニュース・オブ・ニュース

### 生存科学研究所日報

- 5月9日 第5回メディコ・エコノミックス  
研究委員会
- 5月21日 第10回『科学と人間』の会議
- 5月23日 第33回生存科学研究会
- 5月27日 昭和62年度第1回評議員会
- 5月28日 昭和62年度第1回・2回理事会
- 5月30日 第4回医薬品産業の長期展望に関  
する研究分科会
- 6月13日 第1回研究企画委員会
- 6月13日 第6回メディコ・エコノミックス  
研究委員会
- 6月18日 第14回地域医療のあり方研究分  
科会
- 6月27日 第6回維持会員制度推進委員会

\* \* \* \*

### 第5回維持会員制度推進委員会

4月18日午後2時より開催。維持会員制度推進のための方策として、雑誌、学会等への

論文掲載、発表等の実行計画の進捗状況が説明された。また、岡山市で開催する講演会「高齢化社会の地域医療」、「医薬品の開発と行政および倫理」のシンポジウムの準備や、それに関連して維持会員獲得についても協議された。また、それらの活動が、研究所の根幹に触れて問題とならないように慎重であるべきことが討議された。

\* \* \* \*

### 昭和62年度第1回総務委員会

4月25日午前10時より、研究所会議室において昭和62年度第1回総務委員会が開催された。

会議は議事次第に従い、まず、研究所が兵庫県から委託を受けていた、兵庫県生存科学研究組織の設立に関する調査研究委員会の中間報告が実行委員会の久保委員長から報告され、総務委員会の意見を添えた形で報告書とすることが了承された。

引き続き、寄付行為第35条細則に関する件、62年度事業計画に関する件、第3回武見シンポジウム（1988年開催予定）、「医薬品の開発と行政および倫理」シンポジウム（1987年夏）に関する件、ハーバード大学との交渉、総務委員会内の役割分担等が協議された。

\* \* \* \*

### 第34回生存科学研究会開催予定

第34回生存科学研究会は、来たる7月18日（土）午後2時から、経団連会館において開催されることが決定された。「国際競争と生存科学」のメインテーマにそって、報告者は新世代コンピュータ技術開発機構研究所長、淵一博氏。題は「第5世代コンピュータと未来社会」。

\* \* \* \*

### 第1回研究企画委員会

6月13日（土）午前11時から、研究所会議室において第1回研究企画委員会が開催された。冒頭、この委員会は、新しい研究組織に関する規則に従い、研究への対応を迅速かつ組織的に行なうために、総務委員会において取り上げられる研究プロジェクト、シンポジウム、講演会等について検討し、総務委員会へ提出する原案を作成する作業を受け持つものであることが小平敦専務理事から説明された。その後互選により決められた筑井委員長の司会で、早速ハーバード大学との協力事業の来年度の第3回武見シンポジウムの準備についての検討がなされた。

### 研究企画委員会委員

青木 清 開原成允 武田 裕  
筑井甚吉（委員長） 中山昌作

## 公益信託武見記念生存科学研究基金ニュース

### 第8回運営委員会

5月28日（木）午後4時から、銀座日産ギャラリーにおいて公益信託武見記念生存科学研究基金第8回運営委員会が開催され、以下の議題が協議され承認された。

- 1) 昭和61年度事業実績及び収支決算案承認の件
- 2) 昭和62年度事業計画及び収支予算案承認の件
- 3) 熊谷洋氏の運営委員委嘱の件
- 4) 運営委員長交替の件
- 5) その他

\* \* \* \*

事業報告では、基金と財団法人生存科学研究所とが武見博士の遺志の実現を図るために、

連携してそれぞれの役割を分担し事業を進めてきたこと、すなわち、基金は博士の遺業を整理・編纂して、広く流布していくことを主たる任務とし、一方、財団は武見博士の遺業を将来に向けて発展させていくことを主たる任務としてきたことが報告された。

具体的な報告内容は、武見記念論文編集委員会が、藤川委員を中心に図書館情報大学の協力の下に武見博士の全資料の整理・編纂を、小泉委員を中心に武見記念論文集・文集の編集の作業を行なっていること、生存科学に関する表彰と助成のための委員会が不破委員を中心に発足準備を進めたこと、武見英子名誉運営委員長のハーバード大学への派遣、慶応大学医学部国際医学研究会の南米派遣団への

## 国際シンポジウム・ワークショップ

### 「医薬品の開発と行政および倫理」のご案内

(財)生存科学研究所は、今夏、ハーバード大学公衆衛生大学院武見講座の協力を得て下記の要領で国際シンポジウム・ワークショップを開催致します。

ハーバード大学からは、ゴールドマン教授をはじめ5名、FDAより2名、アメリカ医師会 (AMA) より1名、アメリカ製薬協 (PMA) より1名参加。

〈シンポジウム〉

7月30日・31日

於 経団連会館 (東京・大手町)

セッション1. 「新薬開発における政府及び産業の責任」

セッション2. 「医薬品試験のデザインと解釈」

セッション3. 「臨床試験における倫理」

〈クローズド・ワークショップ〉

8月3日・4日

於 経団連ゲストハウス

(静岡県・御殿場)

「米国における医薬品登録のアート」

お問い合わせは (財) 生存科学研究所まで (☎ 03-563-5195)

助成等である。

事業計画では、上記の武見博士の全資料を整理・編纂した武見文献集と武見記念論文集・文集を今年度中に出版すること、武見博士の哲学・理念に関連する研究または実践に対する表彰と助成を今年度から開始することとし、12月には表彰と助成の授与式並びに記念講演会を開催することが承認された。

さらに熊谷洋研究所副理事長の運営委員就任を機に、運営委員長を新たに熊谷氏にお願いすることが全員一致で決められた。

### 公益信託武見記念生存科学研究基金表彰助成委員会委員

青木 清	江見康一	開原成允
熊谷 洋	小泉 明	小平 敦
高田 勲	武見敬三	田村貞雄
筑井甚吉	土屋健三郎	津村重舎
中山昌作	藤川正信	藤野志朗
不破敬一郎	三藤邦彦	安川正彬

\* \* \* \*

6月18日 第1回公益信託武見記念生存科学研究基金表彰助成委員会

### 編集後記

今年は空梅雨とか。梅雨前に真夏並みの暑さで水不足が心配されます。そんなことを考えると、豊かな社会という見方もあるでしょうが、まだまだ人間の力で出来ることは不完全なものであると思ひ知らされます。

7月には、暑さの最中にもかかわらず、岡山の講演会、医薬品関連の国際シンポジウム等研究所の活動は活発です。生存科学研究所

の規則、生存科学研究会の内規も整備され、研究会の会員として例会へ参加出来る道が広くなり、新しい参加者の数が次第に増えてきました。武見先生の理論が常に実践と結び付いていたことを反映して、参加者には学者、研究者ばかりでなく臨床医家として地域医療の実践に取り組んでいる方も多く、研究の輪の一層広がることを期待されます。(N)